上林曉金集十九

筑摩書房

増補改訂 上林曉全集第十九巻

昭和五十五年十二月十日初版發行

著者 上林曉

發行者 布川角左衛門

發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話 東京(294)(291) 七六五一(營業)
六七一一(編集)
振替 東京 六—四一二三

印刷 法令印刷株式會社
製本 矢嶋製本株式會社

© 1980 A. Kanbayashi

(分類) 0395 (製品) 70319 (出版社) 4604

上林曉全集第十九卷目次

隨筆　補遺

噴烟の大阿蘇へ……三
下ノ關漫談會……五
省線電車……七
「新科學的」の思ひ出……九
夏の女の魅力……一〇
野の酒……一〇
舊校舍……一二
紫木蓮の花……一二
木犀……一二
キャラメル……一三
「釣餘談」の餘談……一三
僕の著書……一五
我が家の子供たち……一五
巷の風景……一七
父の教育……一八
七癖……一九
（東京にゐる時は）……二四
賣藥箱……二五
本屋にて……二五
子の消息……二六
地方政客……二八
江津湖……三〇
熱海行……三三
司牡丹の記……三五
戲畫像……三七
小金井養生院……三八
ふるさと夜話……四二
誘蛾燈……四二
鹽鮭……四四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

新宿……四五
某月某日……四六
當り年……四六
鐵瓶……四六
燒いも屋……四六
ギリシャ語……四七
鳥打帽……四七
選擧挿話……四八
わが交友錄……四九
編集者へ希む……五一
獨歩未亡人……五一
元日……五二
十年前二十年前……五三
クリスマス・イーヴ……五五
舊正月……五六
私の讀書遍歷……五七
赤い羽根……五九
酒斷ち……六一
歳の暮……六二
わが青春に悔あり……六三
私の處女作と自信作……六四
私の愛用品……六五
卒業式の季節……六六
腦溢血體驗……六七
高橋牛乳店……六八
大學時代を反省する……六九
老文學青年……七一
ステッキ卒業……七二
コロー……七四
「文章世界」と回覽雜誌……七四
犬の訓練所……七六
醫者通ひ……七七

忘年會――南風會……七九
「田舍住ひ」……八〇
自作の映畫化……八二
ロケーション隨伴記……八三
太宰治と辨當……八九
餞別……九〇
愉しき隨筆……九一
仕事の前の散歩……九二
わが家の趣味品……九三
金子多命を悼む……九四
變な自慢話……九五
田舍のテレビの話……九六
ある結婚式にて……九七
豐田三郎君を悼む……九八
高知よさこい……九八
川端康成朝臣……一〇二
この本「正法眼藏隨聞記」……一〇四
カイツリの思ひ出……一〇五
買物ぎらひ……一〇五
乘りおくれの記……一〇七
自炊記……一〇八
成道寺の梨……一〇九
おつさんが歌つた〝銅貨歌〟……一一〇
ふるさとの初春――大方町……一一一
精神病院の思ひ出……一一三
古本市にて……一一三
古本屋のおやぢ……一一三
なかなか賣れぬ古本……一一四
球磨川下り……一一五
秀英舍の思ひ出……一一六
買つた署名本……一一七
ジュースと赤電話……一一八

天保山棧橋……一二九
名作取材紀行「生家にて」……一三〇
私の好きな食べもの……一三一
私と宗教……一三二
豫讃線にて……一三三
宇和島附近……一三三
大洲にて……一三四
松山にて……一三五
屋島にて……一三五
近況……一三七
坪井立町の八百屋さん……一三七
忘れ得ぬ秀才……一三九
小庭記……一三〇
白雀……一三三
訃報……一三三
褒め貶し……一三四
このごろ……一三五
五目鮨……一三五
星取表……一三六
秋元さん……一三六
病氣……一三七
メーテルリンク……一三八
宇野浩二全集について……一三九
「群島」あとがき……一三九
舊作の發見……一四〇
ある老人の死……一四二
繪馬……一四四
病氣療養中……一四六
見殘した無盡藏……一四八
山歸來……一五〇
ハーレー彗星……一五二

日　記

歳旦日記……一五七
日録……一五八
寒日記……一六四
早春日記……一七四
暮春日記……一八三

追　補

（小　説）

街を行く友……一九七
ガンヂイ……二〇五

（隨　筆）

小さな生活……二一四
僕の村……二一六
病中……二一八
將棋盤に題す……二一九
東京見物……二二九
樂在此中……二三一
桂濱……二三三
マリオネッティ……二三三
足摺岬にて……二三三
臘梅……二三四
岸田の舊邸と横光の舊邸……二三五

（評　論）

眞實と奇警と……二三七
「ユリシイズ」下卷の出版……二三八
文藝時評「文藝春秋」……二三九
「作品」の魅力……二三〇
二つの序詞……二三三

マレー作戰報告を讀んで……三三四
實作者の手記……三三四

書　誌……三三七
上林曉書目……三四三
上林曉年譜……三〇一

索　引……三三一

隨筆　補遺

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

噴烟の大阿蘇へ

五高　徳　廣　巖　城

寮生百餘名を乘せた阿蘇行きの列車は、二時すぎ、龍田口驛を出た。午後の陽に光る黄金の麥畑は、廣汎な肥後平野を被うてゐた。驛毎に汽車は、僅かばかりの息をついて後をも見ずに驀進した。

母と子が麥刈る秋を汽車の旅

汽車は今や徐々に阿蘇の高原を上りつつあつた。ボーと霞んだ平野には、爛熟した麥が輝いてゐた。遙の下の溪谷では青い流が岩の間を縫うて走つてゐた。向うの翠綠の山には發電所が見えた。

肥後の野は暮れなんとして麥の秋

立野驛へ着いたのは三時半。陰氣な空からは氣早な雨がポツリポツリと落ちて來た。高原の一驛に立つた時牛追うて坂を下りて來る女を見た時、雨に濡れながら首をすぼめてゐる自分を見出した時、言ひ知れぬ旅の哀愁は犇々と迫つて來た。

數鹿流の瀧を見た。二つが少しの距離をおいて落ちてゐた。一は美であり、他は壯であつた。それから細い路を傳うて降りると本道に出た。

白川と黑川との會合地に近い戸下溫泉を後にして坂路を登つた。山の感じは完全にからだ中を領してゐた。

栃ノ木溫泉の小山旅館に着いたのは五時過ぎ。二階へ昇る時に見ると、梯子段の上の額には溪香館と書いてあつた。鞄を下し、服を脱いで浴場に入つた。濛々たる湯氣の中ではデカンショ、五高ダンス、水のはね飛ばしなどが目まぐるしく次から次へと起つた。いつ止むとも思はれなかつた。寮生の意氣と自由とは今や其の高潮に達してゐた。他の浴客どもは湯の飛ぶのもかまはずに物珍らしさうに頭を並べて眺めてゐた。硝子障子を開けて頭をつき込んで覗いてゐる殊勝な人達の眼には好奇の光が輝いてゐた。

腹一杯詰め込んだ時再び二階が落ちるだらうと思ふ樣なダンスが始まつた。そこに一團、ここに一團、互に手と手を取り、肩と肩を突き合はし、皺がれた聲の寮歌に調和して危い足取が、こちらの室からあちらの室へとなだれて行つた。バタリと倒れた者は踏まれたままで回復のための大息をついてゐたかと思ふと、ガバと起きて、出ない聲を無理に出して、奇妙な手振足振で又全くもとの元氣にかへつて了ふのだつた。

九時。月光を浴びて溪のほとりに立つた。磊々たる岩の上には浴衣を着た寮生が思ひ思ひに天空を仰ぎながら歌つてゐた。清い流れは忙しさうに流れて行つた。月が白く反射してゐた。我々を威壓する樣な、抱擁しようとする樣な前岸の絶壁には、青葉若葉が新しい生命の息を夜の靜寂の中に吐き出してゐる樣だつた。

山と山とに限られた狹い天空を、月は走つてやまなかつた。

湯の宿に思ふ事なき春の暮
天空を摩す絶壁や青葉して

四時半といふのに猛者連は、便所の下駄を穿いてダンスを始めた。蒲團が頻りに飛んだ。寢てもゐられないので起きて浴場に入つた。朝の湯は昨夕とは全く違つた所の樣に靜だつた。湯氣は人の顏を包んで了つてゐた。時々朝の冷氣が山々と膚に觸れた。

七時半栃ノ木發。青葉の間を辿つて高原に出た。露を帶びた草原には牛と馬とが遊んでゐた。時々懶い聲が聞えた。一帶に繞る外輪山には朝の陽が光つてゐた。雲雀は大空と高原とを我物として根限り囀つた。時々小さい體が低く下つて來たりした。鶯は青葉の蔭に隱れてつつましやかに春を惜しんで鳴いてゐた。

青葉を刈る女等に陽は光る

湯ヶ谷溫泉からは一寸淋しい間を通つた。時鳥が鳴いてゐた。爪先上りの路を汗を流して上つた。上に居る者が「頑張れ！」と叫ぶと、下の者も「頑張れ、頑張れ」と應じた。萱原が一面に山を被うてゐた。其の間を黑々と道は幾筋も通じてゐる。脚下になり行く高原は平和だつた。

萱原に女の日傘動きけり

一つの峠に來た時、千里ヶ濱は展開された。毛氈を敷きつめた樣な草原が廣々と續いてゐた。きんぽうげの黃色な花が交錯してゐた。牛と馬とはあの前面に聳ゆる阿蘇五岳中の最高峯高岳を背景として、夏起る雲の峯の樣に、溶岩の恐ろしげな紫褐色の裸山から吐き出される白い噴煙にも無關心で遊んでゐた。實際、阿蘇は偉大なる自然の力を惜氣もなく出してゐた。右と左には五岳中の烏帽子岳、杵島岳が聳えてゐた。心と足はおのづと大自然の方へ引つ張られて行つた。

噴煙に五月の空の曇りけり

つつじは低く群つて咲いてゐた。火山灰の土は頻りに埃を上げた。

噴煙は目前にあつた。腹を拵らへるために茶店に入つた。宿から持つて來た二つの握り飯の中には夫々梅干が二つづつ入つてゐた。其處から少し離れて寺と宮とがあつた。寺では僧が、宮では神官がお札を賣つたり、繪葉書を賣つてゐた。其の壁には「月光を浴びて登山」、「暴風を冒して登山」などの字が姓名、年月日と共に見えた。此の三軒が最高所にある家であつた。

濛々と、地軸に通ずる二つの噴火口からは水蒸氣が出てゐた。硫黄の臭みがあつた。此の時まで心の中にあつた好奇心は全く消えた。大恐怖の念は腰を後に引いて頭だけ延ばして覗かしめた。頭の中が何だか一種の混亂を呈して足元が定まらなかつた。無言で大漏斗の噴火口を眺めた。大自然に遭遇する時に、人間はあまりに小さい、意氣地のないものであつた。奔放に振舞ふ自然は大いなる力を藏して悠々と煙を上ぐるのみだつた。一つの噴火口には此の間心中した福岡縣の人の中の女だと云ふのが見えた。硫氣孔近くにセルか何かであらう青味を帶びた着物に包まれて其の殘骸を横へてゐた。現世に失望して、死によつて幸福を求めた彼等の冥福を祈らざるを得なかつた。噴煙が時々其の殘骸の上に低迷して來た。

午後五時宮地を發した列車の中では盛にデッカンショが響いてゐた。偉なる大阿蘇の頂にはもう雲が這つてゐた。團々として沈むに急しい夕陽は赤々と燃えてゐた。

（一九二一、六、六）

下ノ關漫談會

眞山青果氏の戲曲から拔け出てきた坂本龍馬は語る。

「文久三年五月馬關海峽を通過する米國船を長州兵が砲擊したもんだから、翌る年の元治元年八月には馬關は英佛米蘭四國聯合艦隊の砲火を浴びて、數個所の臺場を占領されたことがある。僕は馬關へは何度も行つた。一番思ひ出の深いのは、慶應元年五月竹崎町の白石方にゐた時のことだ。僕は此處で桂小五郎と西郷とを握手させて、薩長聯合を策するつもりだつた。その日は、前の晩稻荷町で飲み過ぎ、桂に叱られるもんだから途中で錢湯にはひり、清潔になつて宿へ歸つて來たもんだ。僕は桂と緣側に坐つて國事について色々話してゐた。胸の中では西郷が今來るか今來るかと氣が氣ではない。時々目の前の海峽を、汽笛を鳴しながら蒸汽船が通る。僕はその度に立ち上つては耳を澄ます。幾度失望したか知れない。今度こそ西郷が來たんだらうと思つて伸上ると、英吉利の商賣船だつた。ラストルカストの色が黄白に見えてゐたねえ。僕は失望したねえ。間もなく西郷を連れて來るはずの中岡愼太郎が單身かへつて

來たもんだ。西郷は豐後の佐賀ノ關沖まで來てゐたが、急に航路を更へて土佐沖を通つて京都へ直航してしまつたんださうだ。あの時は殘念だつた。それで西郷桂の會見は京都の會見まで延びたわけだ。あの頃漸く馬關海峽には生氣が動いてゐたねえ。あすこを吹く風は何となく清新だつたもんだ。」

神戸稅關の若い官吏M君

「僕は關門海峽を通過すること三十六回に及んでゐるが、下關に上陸したのは一回きりだ。門司には度々上陸してよく飲み廻つたが、商業都市として又港市としての勢力はすつかり門司に奪はれてゐるね。下關は住宅地だ、漁港だ。朝鮮關東洲で捕れた魚類を陸揚げして、阪神地方や東京方面へ送るので命脈を保つてゐると言つてもいい。近代工業は港外の彦島に造船所其の他を持つてゐるに過ぎない。それから關釜連絡船と關門連絡船。下關は言はば大きな渡し場だ。春帆樓は日清戰爭の錦繪的遺物だ。ここから見ると關門海峽も門司も眼下にある。この海峽は海峽といふよりも一つの急流のやうに僕には思はれる。後の山つづきが要塞だ。うにとふぐとが海峽の名物だ。だがそれよりも、關門海底トンネルが開通した曉には、日本人の現實生活に一つの幻想をつけ加へることになるねえ。日本のケラーマンは『トンネルの花嫁』でも書くだらう。」

退役要塞士官の夫人

「私どもの主人は下關要塞の砲兵士官でしたので私も長らく下關に住んでゐました。もう十年も前のことで御座居ます。主人は大きな靴の音を立てて毎晩火藥庫の見廻りに出掛けました。火藥庫には歩哨がゐるのですけれど大變火の要心をするので御座居ます。もと山砲の五聯隊と六聯隊とがありましたが、六聯隊は小倉の方へ移りました。あすこの要塞が必要となるまでには、壹岐對馬の砲臺が大奮闘をしてゐるので御座居ます。名高い赤間宮のお祭はそれは賑やかで御座居ます。其の日には大勢の女郎衆達が三時間も四時間もかかつて、汗を流しながら八文字を踏んで繰り込みます。大變な見物ですがなかなか辛いことだらうとも思はれます。御不淨にも行かれないので、前の日から水氣のものは食べないやうにしてゐるさうで御座います。昔平家が滅亡した時生き殘つた女達が漁人相手に稼ぎ始めたのが、今に連綿と殘つてゐるのださうで御座いますねえ。遊廓は二タ所にございます。水に映る灯の影、關門海峽ではあれが一番美しうございますわ。」

九州へ歸省してゐて歸つて來た中學教師S君

「僕は往きも歸りも下關で誰何された。尤も僕もネクタイをはづし、髪をぼうぼうさせてゐたから危險人物と間違へ

られるのも尤もかも知れないが、二度もやられるとはよくよくのこつた。根が中學教師だからねえ。それでもつてみても、あすこのさう言ふ方面の警戒が如何に嚴重を極めてゐるかが判るね。第一朝鮮人が本土へ這入つて來る玄關だし、又思想人の國際的跳躍の關門だからね。僕も夜の關門海峽の灯を愛するね。連絡船に乘ると手摺りの外は黑い海と海風と灯の列だ。ここまでかへれば僕達はもう國へかへつたやうな氣がする。銅鑼が鳴つて連絡船が動き出す前、朝鮮行きの方は乘つてゐませんかと船員が言つて來る。すると必ず一人や二人大急ぎで關釜連絡船の方へ移つて行く。關釜連絡船の方では又九州行きの者が乘つてゐることがあるだらう。一寸間違へば飛んでもなく九州へ行き朝鮮へ行くことになる。この微妙な使命を持つ所に下關の交通上の重要さがあり、又無雜作な大陸との接觸がある。」

（一九三〇・六・五）

省線電車

省線電車を常用してゐるものは何十萬とあるであらう。だが、愛用してゐるものはどれだけあるであらうか。尤も、或るサロンからの樂しい延長であつたり、美しい人たちと同車することが出來たりする場合には、愛用されたことになるのである。

けれども、自動車をドライヴすると同じ氣持で、省線山手線をドライヴすることは一層快適なことにちがひない。うちに居て退屈して仕方のないとき、心の鬱して仕方のないとき或は心が逞しくてぢつとしてゐられないときなど、必ず一度は試むべきものではないだらうか。われわれの心は必ず晴れ晴れとするにちがひない。一まはりには一時間と何分かを要する乘車賃はいくらだらうか。恐らく二十五錢ではないかと僕は思ふ。そしてその切符は、例へば「新宿驛より新宿驛」でなければならぬ。さういふ山手線一週切符が發賣されねばならぬ。

たまには、醉つ拂つた男がぐつすり眠り込んで、目がさめてみると一まはりしてもとの驛へ戻つて來てゐたといふ話や、網棚の上に荷物を置き忘れたので、その電車が一まはりして來るのを待ち受け、さつき自分が乘つてゐた車の中へはひつて行つて荷物を取つて來たといふ話などを聞く。これらは確に回歸的な山手線の興味である。

中央線の直線コースを、次第次第に東京を離れて行く氣持には、遠心的な淋しさがある。それよりも、吉祥寺あたりから眞つ直に都心に向つて肉迫して來る氣持には、たてがみを靡かすやうな颯爽感がある。山手線を東京を圍む圈とするならば、中央線で新宿驛を通り過ることは圈を突破して、東京の中へ深く突入する感じを與へる。

新宿代々木間、東京神田間では、二つの線が平行して走

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com